

ヘシオドスの労働観

——『仕事と日』を中心として——

中野千秋

目次

- 序 労働の始源を求めて
- | | |
|------------------------------|-----------------|
| 1 労働の起源について | 2 労働の意味 |
| (1)神ゼウスの報復としての労苦 | (1)正義の勧め |
| ——プロメテウス・パンドラ説話の
示唆するもの—— | (2)正しく労働することの意味 |
| (2)労働の発生と劣悪なる「現代」 | |
| ——五時代説話の意味するもの—— | |

序 労働の始源を求めて

人類の歴史が始まって以来、神が宇宙の中心であったのに対し、近代市民社会が出現すると、人間が宇宙の中心であるとする思想が人びとの頭脳を支配していく。それは、人間の自由な精神の発現を尊重する考え方であるが、そこには人間の欲望追及を限りなく認めるとい一面も含まれていた。その結果、一方では確かに物質的豊かさや便利さはもたらされたが、他方では、

人間疎外、階級対立、自然破壊というさまざまな問題が生じることにもなったのである。現代は、まさにこのような近代的人間観に反省を加えるべき時代として認識されなければならない。

その際、反省すべき問題の核心は、「人間の働き」であり、それによって人間に何ができるのかということである。そこで、われわれは、今一度、人間の労働の意味を考え直す必要があるのではなからうか。それは、人間の力ではどうもしがたい宇宙の法則性（神の働き）との関わりにおいて、人間の可能性を問うことに行きつくであろう。

真理は、最も始源的なもの、したがって最も素朴なものの中に現れているという。現代に生きるわれわれは、人間社会の原点ともいべき古代の人びとの労働観を問い直すことによって、多くの示唆を得ることができると考えられる。本稿では、そのような観点のもとに、ヘシオドスの『仕事と日』を中心的題材としてとりあげ、宇宙的秩序と人間社会と労働との関わりを考察していくことにする。

ヘシオドスは、紀元前700年頃におけるギリシアの叙事詩人であり、その二大主要作品として『神統記』と『仕事と日』がある。わが国におけるヘシオドス研究の第一人者である廣川洋一は、タレスを哲学の創始者とみなす従来の通説に対し、ヘシオドスを「最初の思想家」として位置づけている⁽¹⁾。

廣川によれば、『神統記』は、宇宙秩序の観念を歌いあげたものである。つまり、『神統記』は、「神々の出生を系譜によってひとつの『全体』のうちに歌いあげ、そしてゼウスの秩序世界がいかにして生じるにいたったかそのありさまを物語り明らかにするのを最大の意図としていたと考えられる。」⁽²⁾そして、「それは神々の誕生物語であるが、(中略)同時に宇宙・自然の誕生物語でもある⁽³⁾」とされている。

また彼は、『仕事と日』を人間秩序の観念を述べたものとして位置づける。すなわち、それは「宇宙の生成と現実私たちをつつみこむこの自然世界の秩序について語り終えた詩人がひとりの『人間』として、ついでは人間社会において、そして人間個人において同じ『秩序』の問題を問いただそうと試

⁽⁴⁾みた」ものである。

では、この『仕事と日』の主題は何か。それはまさに「正義と労働」である。アリストテレスに代表されるギリシア思想においては、一般に労働は卑しむべきものとされているが、『仕事と日』においては、その様相は全く異なっている。つまり、人間社会に正義を、したがって自然の正しい秩序を実現するために、人間は「正しく労働する」こと以外にないというのである。こうして、ヘシオドスは、人間の労働をより価値のあるものとして積極的に意味づけ、正しく働くことを人びとに勧めることになる。

これは、「祈りかつ働け」という標語のもとに、禁欲的な労働に打ち込んだ人びとによってつくられた一つの時代、つまり近代という時代の問題性を反省するうえで、またとない他山の石であろう。

以下、『仕事と日』に見られる人間の労働のさまざまな局面を、詩の内容に則して追っていくことにする。

1 労働の起源について

(1) 神ゼウスの報復としての労苦

——プロメテウス・パンドラ説話の示唆するもの——

まず、『神統記』において、ゼウスは、最初に賢明を妻とする。そして彼は、続いて掟法を娶ることによって、季節たち、すなわち秩序、正義、平和と、運命をその子としてもつようになる⁽⁵⁾（『神統記』887—904）。つまり、ゼウスは、正しく妥当な平衡原理の具現者であり、宇宙自然の正しい秩序の限度を踏み超えようとする者たちに報復を与える真正の裁定者とされるのである⁽⁶⁾。

次に、『仕事と日』におけるゼウスも、やはり宇宙自然の神的秩序に基づく正義の裁定者であることにはかわりはない。『仕事と日』の最初の部分で、ヘシオドスはゼウスに語りかける。「目と耳によって注目されよ、正義によって宣告を真直なものとなしたまえ」（8—9）と。

かの「プロメテウス・パンドラ説話」は、そのゼウスをプロメテウスが欺いたこと、つまりプロメテウスがゼウスの定めた正しい秩序の限度を超えたことに対する、ゼウスの報復を物語るのである。

ところがゼウスはその心に怒って「暮しの糧を」隠された、
奸智に長けたプロメテウスが彼を欺いたから。
そのためゼウスは人間どもに辛い難儀を企てられたのだ。
さて「ゼウス」は火を隠された。(47—50)

これに対し、プロメテウスは、さらに人間たちを救おうとして、ゼウスのもとから火を盗み返すのである。

ところがそれをイアペトスの秀れた息子がふたび⁽⁷⁾
智に富めるゼウスのもとから人間どもに盗んでやった、
「それを」中^{なか}空の大茴香にし^{なかつら}のばせて、雷を愛でるゼウスの目にふれな
いで。(50—52)

しかし、プロメテウスの行為は、けっして人間たちを救うことにはならなかった。逆に余計な悪知恵を働かせた結果、ゼウスはますます憤り、新たな報復として、人間たちにより大きな禍いをもたらすことになったのである。

イアペトスの子よ、衆に秀れて智略に長ける者よ、
「汝はわが心を欺き 火を盗んで喜んでいる、
だがこれは汝自身にとっても後の世の人間どもにとっても大きな禍いとなるであろう。(54—56)

ゼウスは、かくして「女」を創り、彼女を「パンドラ」と名づけた。ゼウスがこの女を人間たちに「禍い」として授けたことによって、人間たちは、労苦や病氣や老いや数多くの災難から逃れることのできないものになってしまったのである。

すなわちこのことの前には人間どもの族は地上に住みくらしていたので
ある、
禍いも辛い労苦も、
人間どもに死をもたらす厄介な病氣もなしに。(90—92)

これが、いわゆる「プロメテウス・パンドラ説話」の大筋である。この説話の中で、はたして「労苦」は、パンドラ受容後（あるいは同時）に発生したのか、それ以前にすでにあったのかという「労苦」成立の時期は、解釈の分かれるところのようである。しかし、いずれにしても、ゼウスがプロメテウスの火盗みに対する罰として、人間どもに労苦をもたらしたということが重要なのである。

さて、ここで問題となるのは、「プロメテウス」および「火盗み」の意味である。

まず、「プロメテウス」とは、「先を見とおす者」という意味で、ゼウスが一目おくほどの知恵者として特徴づけられている。ところが、プロメテウスには、エピメテウスという双子の兄弟がいる。エピメテウスとは、「後から考える、つまり手遅れになってはじめて気が付く者」であり、愚鈍さを特徴とする。そして、ゼウスの人間たちへの贈物「パンドラ」を、「受けとらずに返せ」というプロメテウスの忠告を忘れて受けとってしまったのは、他ならぬこのエピメテウスだったのである(84—89)。つまり、プロメテウスとエピメテウスは、実は一体両面であり、人間の知恵のもつ賢と愚の二面を表していると考えられるのである。プロメテウスの「智略」も、全知なる神ゼウスの前には、所詮愚かな「浅知恵」にすぎないのである。⁽⁸⁾

また、プロメテウスの「火盗み」という場合の「火」は、ギリシア神話において、人間の知識、技術、文化などを象徴するものとしての意味をもっている。さらに、火盗みの返礼として人間に与えられた女「パンドラ」も、「火」の性格を有しており、それは食欲や性欲において、男の生命を貪り飽

くなく消費し尽くすものでもある。⁽¹¹⁾人類にとってこの最初の女が贈られたことによって、人間の男たちは「大いなる災厄」である女たちと一緒に住み、「終日精出し」額に汗して得た労働の果実によって彼女らを養わなければならなくなったのである（『神統記』591—599）。

要するに、「プロメテウス・パンドラ説話」において、プロメテウスは、宇宙自然の秩序の具現者であるゼウスを欺き、人間に「知」をもたらす。このことは、人間が自らの分別でもって、神の秩序から独立して生きていくことを示している。そして、そのことに対する報復として、ゼウスは禍いと労苦を人間たちに与えた。これが、人間の「労働の起源」ということになるのである。このような労働の起源とその意味づけが、人間が神を裏切って「知」をもつに至ったこと、および人類にとって女性というものの存在の重さが大きいのかかるに至るべき事として述べられている点において、キリスト教の「楽園追放」に見られる「原罪」の考え方に酷似していることは、きわめて興味深いものである。⁽¹²⁾

(2)労働の発生と劣悪なる「現代」

——五時代説話の意味するもの——

ヘシオドスは、『神統記』において、三世代にわたる時間的展望のもとに神々の世界の変遷史を語った。これに対し、『仕事と日』では、人間世界を五つの世代に区分して時間的流れのなかに置き、その全体的展望を行なっている。⁽¹³⁾つまり、プロメテウス・パンドラ説話が終わると、彼は、黄金、白銀、青銅、英雄、鉄という人間たちの五つの世代を説話的に物語るのである。

そしてヘシオドスは、人間は神々と同じ根源から生まれでたとして、この説話を始める（108）。彼は、ゼウスがまず最初に創られた「黄金の族」について、次のように述べている。

神々のように、この人びとは暮したのだ、憂い知らぬ心をいだいて、
労苦も悩みもなく。（中略）

豊饒な地は 稔りをもたらすのだった、
ひとりでに 豊かにしかも借しげもなく。
彼らは気ままに穏やかに地の稔りを享けた、善いものに恵まれて。
家畜にも富み、浄福の神々にも愛でられて。（112—120）

この五時代説話の始まりの部分と、プロメテウス・パンドラ説話の関連の有無については、さまざまな議論がありえよう。しかし、二つの説話とも、人類がその最初期には、暮らしの糧に恵まれた至福な状態にあったことを物語っている点で類似していることは注目に値する。つまり、人間たちは、もともと何の労苦も悩みもなく、あたかも神のように暮らしていたのである。

ところが、二番目に創られた白銀の族は、その姿においても思慮においても黄金の族とは全く異なるものであった。つまり、白銀の族は、百年の間、子供のままに滋しみの母のもとで戯れながら育つ愚か者であり、その暗愚さのゆえに、彼らは成年に達すると難儀な目に遭って長く生きながらえることはできないのである（130—134）。

そして、その愚かさは、神を崇めることも知らぬ人間どもの^{ヒュプリス}傲慢に由来するのである。

彼らはたがいに向うみずな^{ヒュプリス}傲慢を慎むこともできず、
不死の神々を崇めようとしなければ、
至福の神々の祭壇に贅を奉げようとしなかったからだ、
どこに住居しようとそれが人間どもの務めであるのに。（134—137）

それは、長い間安逸のうちに暮らしてきたがゆえに、何か困難なことに会おうとそれを克服することのできぬ脆弱な人間を想起させる。そして、自らのうちの傲慢のゆえに、神を崇めることもなく、全く神から独立して歩む人間たちの生活が始まったことを物語っているのである。

しかし、われわれが人間たちのうちに労働の存在をはっきりとつかうか

ることができるのは、次の青銅の族においてである。

この者どもの武具は青銅づくり、住居も青銅づくりで、
青銅 [づくりの道具] で仕事をした。(150—151)

そしてこの青銅の族は、「怖しく力も強い族」(145) であり、戦いと傲慢を得意としている。

軍神の

呻吟にみちた業と傲慢を得意とした者ども、穀物を振らず、
鋼鉄の頑なな胆をもつ、
近寄ることもかなわぬ者ども。恐ろしく力強く、当るべからざる腕が岩
乗な
体軀の肩から生えていた。(145—149)

この語りの部分は、傲慢のうちに安逸を食っていた者どもに対する青銅の族の憤りと、そのゆえに、あたかも彼らが革命の戦争を巻き起こそうとしているかのような印象を与える。しかし、この世代の人間たちの傲慢はますますエスカレートし、「この者どももたがいの手にかかって身を滅ぼし」(152) ていくのである。

かわって現れる第四の世代は、ゼウスが、「いっそう正しく一段と秀れた族」(158) として創った「英雄たち」である。彼らは、「半神と呼び名され」(159)、ヘシオドスと同時代に生きる人びとの「先代」(160) なのである。しかし、彼らの時代にも、「忌まわしい戦争と怖るべき雄叫びが」(161) 吹き荒れ、やがて彼らはトロイアの地で滅ぼされる。ところが、戦いに敗れたはずの彼らのその後の暮らしは、かえって恵み深いものであった。

この者どもには、人間どもから遠く離れたところに暮しの糧と住居を与

ヘシオドスの労働観

え、

大地の涯に彼らを据えられた、父なるゼウス、クロノスの御子は、
神々から離れたところに。この者どもをクロノスが治めたもうたのだ。
さて彼らは憂い心なく 住まうのだ、
渦深いオーケアノスのほとり、淨福なものたちの島々に。
幸いな 英雄たちよ彼らのために甘蜜のみずみずしい果実を、
歳三度 豊饒の大地は 稔らせる。(167—173)

さて、次にヘシオドスは、「ああ、これから後はもはやわたしは生きながらえるべきではなかったのだ」(174) という嘆きの言葉を発しながら、五番目の「鉄の族の時代」に移る。それは、まさにヘシオドスの生きた「現代」であった。

ヘシオドスは、自らの生きる時代の映し身である鉄の族たちについて次のように述べている。

けっして昼も

労苦と悩みの止むことなく、夜もまた人びとは [難儀に]
身を痩せ細らせてとどまることを知らないであろう。厄介な苦勞を神々は与えるであろう。(176—178)

彼はさらに続けて言う。

父は子らと 子らは父とすこしも似ず、
客は主人と、友は友と、
兄弟は親しめなくなるだろう、昔のようには。
人びとは束の間に老いていく両親を蔑しろにして、彼らを
酷い言葉を浴びせてなじるであろう、
極道どもは、神々の復讐に気づかぬやからは。

また老いた両親にもこの者どもは養育の料を返そうとはしないだろう。
腕力を正義とする者どもは、一方は他方の都市に略奪をくわえるだろ
う。

誓いを守る者、正しい人、

善い者への敬愛の念は失われ、悪事を働く者、傲慢なやからを
人びとは褒めそやすであろう。正義は腕力のなかに生じ、恥心
は失われるであろう。悪人がより善い人を

邪まな言葉をあびせて押しのけ、誓さえ立てるだろう。

妬みはみじめな人間どもすべてに

付きまとはなれないだろう、喧しい声あげ、邪まな業を喜び、憎々
しい目つきをしながら。

まさしくその時こそ、オリュンポス指して路広の大地を離れ、

美しい肌に白妙の衣をまとして

神々の御一統につらなるべくお立法になるであろう、人間どもを後に残
して、

恥心と憤りは。悲惨な苦悩の数々は

死すべき身の人間どもに残され、禍いを避ける術もなくなるであろう。

(182—201)

まさに鉄の時代は、絶望の時代とも言うべきなのである。

ところで、これまで述べられてきた五時代説話は、まことに不可解で思う
にまかせぬ諸行無常の人間生活を物語っている。何の労苦も悩みも知らぬ黄
金の時代に続く白銀の族が、慈しみ深く育てられ安逸のうちに暮らす中で傲
慢に陥り、青銅の時代には戦乱の世に突入する。そして、戦いに敗れた英
雄たちが、かえって豊かな地に住むことになる。しかし、最後の鉄の時代に
は、正義や善が歪められ、腕力や悪事や傲慢がまかり通るようになるので
ある。

そして、この五時代説話は、人類の歴史の変遷を全体的に展望するという

よりも、むしろヘシオドスの生きた「現代」が、不正と禍いに満ちた劣悪の
時代であるという現実を認識するための語りであると考えべきなのであ
る。

かくして、「現代」は最悪絶望の時代と目に映るのである。しかし、ヘシ
オドスは、「現代」を全く救いのないものと見ていたのでもなければ、けっ
して人類の滅亡を予測したのでもない。実はその全く逆で、この絶望の淵に
来て、よりよい未来を、新しい時代の到来を予測したとも考えられる。否、
彼は、別のよりよい時代がもたらされることを願い、そのことを共に「現代」
を生きる人びとに自覚させるべく思いを潜めていたにちがいない。この点に
おいてこそ、『仕事と日』における主題を考えるべきなのである。

すなわち、続く部分(202行目以下)で「正義」の実現を促し、さらにその
ためには「労働」が必要であることを説き(298行目以下)、そして後半部分
(381行目以下)ではその具体的方法として農労働のあるべき姿を克明に描
き出すのである。ヘシオドスにとって、『仕事と日』における「正義」と「労
働」は、人間生活の秩序原理を宇宙自然の神的秩序に同化させ、それによっ
て、よりよい未来を切り開くための二つの主題なのである。

2 労働の意味

(1)正義の勧め

先の五時代説話において、ヘシオドスは、彼の生きる「現代」を、労苦と
災難に満ちた劣悪の時代と認識した。そして彼は、その直後(202行目)か
ら、鷹と夜鶯の寓話をもって「正義の勧め」を行なっている。このことは、
劣悪な「現代」が、必ずしも絶望を意味するのではなく、人間社会に「正義」
を実現することによって、よりよい未来を展望しうることを意味していると
解釈できるのである。

そのようなヘシオドスの期待、確信は、次の章句からも読みとることがで
きる。

けれども今は、人びとの間で正しい人ではありたくないのだ、このわたし自身も

わたしの息子も。人が正しくあることは禍いだから。

より不正な者がより大きな正義を得るのであるならば。

だがかかることを賢いゼウスが成就なさるはずはけっしてないと信じている。(270—273)

彼は、劣悪の「現代」を不正のまかり通る時代として受けとめながらも、神はそのような状況が続くようなことをけっして許さないと信ずるのである。

それでは、彼の想起した「よりよい未来」とはいかなるものか。それは、換言すれば、「正義」とは何を意味するのかを問うことでもある。

この点に関して、ヘシオドスは、直接答えるものではない。彼は、正義を損うものとして「傲慢」と「暴力」を指摘し、人間たちがそれらを慎むことによって正義が実現される、という筋道で正義の勧めを行なうのである。

まず彼は、夜鶯に対する鷹の語りかけのすぐ後で、「傲慢」に対する次のような戒めを行なっている。

さてベルセスよ、おまえは正義に耳を傾け傲慢を殖やしてはならない。

傲慢は貧しい者には禍いだから。富める者も

それを担うのは容易ではない、傲慢におし潰され

破滅に出あうからである。より善い道はもう一方の側へと

正しいことどもへと赴くことである。正義は傲慢に勝るのだ、(213—217)

この章句を見るにあたり、あの白銀の時代以降、人びとが傲慢に陥り、戦いと破滅を繰り返していったことが容易に思い起こされる。

これに対し、正義に耳を傾け、真直な裁定を下す人びとは、「正義の都市」をつくり上げ、そこに栄えることができるというのである。

正しいことから「道」を踏み外さぬ人びとには、

その都市は咲き匂い、民らはそこに栄える。

子らを育む平和は国中に遍く、この者たちにはけっして

辛い戦争の徴しを定められはしないのだ、見はるかすゼウスは。

正しく真直な人びとにはけっしてつきまといはしないのだ、飢餓も破滅も。(226—231)。

そして、ヘシオドスは、都市に住む者はけっして曲がった裁定をしてはならないと忠告する。さもなければ、その償いは結局民衆が支払う事になるというのである(258—264)。

苛酷な傲慢と邪まな業をこととする者、

この者どもには、クロノスの御子、見はるかすゼウスは正義を定めたもう。

しばしば都市全体が「罰」を蒙るのだ、ひとりの悪人、

罪を犯し向う見ずな仕業を企てるこの者のために。

この者どもにクロノスの御子は大きな災難を、

飢餓と病没をあいっいで天降され、民どもは死に絶えていく。(238—243)

また、正義に対立するもう一つの「暴力」に対しては、次のように戒めている。

そして今は 正義に耳を傾け、暴力はすっかり忘れるのだ。

というのも人間どもにはこの良習をクロノスの御子は定めたもうた、

他方 魚や獣や翼さもつ鳥どもには
たがいに喰いあうこと を。というのもこの者どもには正義がないから
である。

人間たちには正義を授けたもうたが、正義こそ きめて善いものである。
すなわち誰れであれ 正しいことどもを弁え 主張するなら、
その者に 見はるかすゼウスは幸いを授けたもう、

(中略)

さて誓いを正しく守る者の子孫は後の世にいつそ栄えることになる。
(275—285)

要するに、正義がふみにじられ、傲慢と暴力の蔓延しているとき、人びとの間には、つねに「飢え」「戦争」「破滅」がつきまとい、正義がゆきわたるところには、「平和」「稔り」「栄え」がもたらされる。このような因果図式によって、ヘシオドスは、正義の勧めを行なっているのである。

しかし、そのようにして「正義」を実現し、人びとを栄えに導くことは、必ずしもゼウスの報復を受ける以前へ、もしくは黄金の時代への復帰を意味するものではない。それらの時代において、人びとは何の禍いも労苦もなしに、神々と共に暮らしていた。そこでは、正、不正という人間的尺度を用いることは、控えられなければならなかった。それは、人間世界の秩序原理が、未だ宇宙自然の神的秩序と切り離し得ぬものだったからである。しかし、⁹⁹一度傲慢に陥り、自然の神的秩序とのつながりを失った人間たちは、人間世界の中で正義を実現すべく努めなければならなくなったのである。

まことに禍悪を手に入れることは、どんなに数多くても、易しいこと。

[禍悪への] 道は平坦で、[おまえの] すぐ傍に通じている。

ところが正しい栄えの前には不死の神々は汗を置かれた、

それへの道は長く険しく しかも

はじめはあらい道。だがひとたび頂上をきわめれば、

そのあととはまず 容易である、きびしくはあるにしても。(287—292)

神の秩序から独立して歩みはじめた人間たちが、道を踏み外し、禍いを招くのはいかにも容易である。その中で、人びとが目指すべき「正しい栄え」の前に、神々は「汗を置かれた」。そして、それへの道は「長く険しく、きびしいものだ」というのである。このことは、人間が汗を流し労働することによってのみ、はじめて正当な富、すなわち「正しい栄え」を享受することができるということを物語っていると考えられる。つまり、人びとが、正義を実現し、正しい栄えを得るためには、労働することを通じて自然の秩序を人間世界の中に発現させる以外にないのである。

(2)正しく労働することの意味

労苦と禍いに満ちた劣悪なる「現代」において、人びとが「よりよい未来」を切り開くためには、「正義」を実現しなければならない。「正義を実現する」とは、人びとが「傲慢」と「暴力」を慎み、宇宙自然の秩序を自らの手で人間社会の中に発現させることに他ならない。それは、長く、険しく、きびしい道であるが、そうすることによってのみ、人びとは「正しい栄え」を享受することができるのである。

かくして、ヘシオドスは、続く箇所でも、人間の労働の必要性をきっぱりと明言するに至るのである。

ペルセスよ、生まれ貴いものよ、働くのだ、飢餓がおまえのところを避け
長く、冠美しいデメテルがおまえを最^{ひい}なさせて

おまえの納屋を食糧でいっぱいにしてくださるように。

飢餓はまことに無為なものにとって恰好の道づれだからである。(299—

302)

今やヘシオドスにおいて、「労働」は、人びとが「正しくあること」と切

り離しがたいものとして位置づけられたのである。ここまで来たとき、彼は、労苦としての労働はきびしいものではあるが、「喜び」としても見いだされるべきものとして、新たな意味づけをすることになる。

おまえは仕事を喜びとして適正にすすめるようにすることだ、
時宜の食糧でおまえの納屋どもがいっぱいになるように。
仕事によって人びとは羊にも富み、裕福にもなる、
また仕事をするものどもはいっそう愛でられるだろう、不死の神々にも
あるいは人びとにも。(306—310)

ここでの仕事は、「喜び」として行なわれるだけでなく、「適正に」(to order your work properly) 秩序正しくすすめられるべきものであるともされている。そのように、「正しく労働する」ことによって、四季の食糧に恵まれ、富み、人びとにも愛され、そして「正業も声望も伴う」(313) のである。

また、そうして得られた食糧や富は「神のさずけたもうた」「善き」(320) のものである。財産を奪い取る者などは、「いとも易しく神々がこの者を影の薄いものに、また、この者の家を衰えさせたまう」(325)。秩序正しい着実な労働こそ、正義にかなった人間生活の仕方であり、「正業」を得る道なのである。

ところで、重要なのは、ここでいう「適正な」「正しい」労働とはいかなるものかということである。実に、ヘシオドスは、この問題に対し、『仕事と日』の後半すべてを費やして答えている。彼は、

さておまえの胸うちの心が富を得たいと願うなら、
このように為せ、この仕事をしたら次の仕事へと【手順よく】働くがよい。(381—382)

と述べ、以下、正しい仕事のあり方について、こと細かに展開するのであ

る。

まずはじめに語られるのは、農労働のあり方についてである。この部分は、383行目から617行目という最も長くしかも最も具体的な展開が見られる部分であり、農労働が当時の人間生活の中で、いかに重要な位置を占めていたかをうかがい知ることができる。

次に、農労働に関する語りから、いくつかの部分を抜粋し、その具体的な内容を見ていくことにしよう。

アトラスの娘たちの^{すばる}昇星が昇るようになったら、
収穫にとりかかり、沈むようになったら耕作にかかれ。
彼女たち^{フレイアデス}「昇星たち」は四十の夜と昼のあいだ隠れているが、
さて歳が巡るとふたたび
姿を現わす、鉄鎌の初研ぎの始まるころに。
まことにこれが 平野の習い【仕事のきまり】であり、【そしてこれは
また】海辺に
住む人びとや山峡の窪地、
湧きかえる海から遠く離れたところ、肥えた土地に
暮らす人びとの【習いでもあるのだ】。裸になって種を播き、
裸になって犁きかえし、裸になって刈り取るのだ、おまえがデメテルの
時宜の畑つ物を頂きたいと願うなら。(383—393)

さて厳しい太陽の力が 汗をしたたらせる
炎熱を収め、力強いゼウスが 秋の雨を送られたあと、人びとの肌は
たいそう爽やかになる。
すなわちこの頃に^{セイリクス} 狼 星は
死すべき定めの人間どもの頭上を
星は僅かにその歩みをつづけ、夜には【その歩みの成果を】いっそう多
く取り入れるのだからである。

いちばん虫喰いが少ないのだ、この時分に鉄斧で伐られた
木材は。葉を地面に散り落とし、芽吹きも止んでいるからだ。
この時季は伐木が時宜にかなう仕事であることを思い出すことだ。(414
—422)

心を配れ、おまえが鶴の声を耳にしたなら、
雲間高くに年毎にひびかせるその声を聴いたら。
鶴は耕作の合図をもたらし、雨風の冬の季節を
知らせるのだ。またその声は牛をもたない者の心を噛む。
この時季こそは〔牛舎の〕内にいる角の曲った牛どもに餌をやるがよ
い。(448—452)

これはいちばん厳しい月、
冬嵐の月、家畜にとっても辛く人間どもにも難儀な月である。
この時季には、牛どもには餌は〔いつもの〕半分でよい、だが人には食
糧を
ふだん以上にたくさん宛うのだ。役に立つ夜々長いのだから。
これらのことに心を配って、一年がめぐりつきるまで、
〔食糧の配分については〕夜と昼を〔適正に〕釣り合わせることだ、
ふたたび万物の母なる大地がさまざまな稔りをもたらす時まで。(557—
563)

βレイアデス ヒョアデス
昂星と雨星とオリオン星が沈むようになったら、
そのときには季節の耕作〔播種〕が来ていることを思い出すのだ。
こうしてまる一年が順調に地下で過ぎていくことだろう。(615—617)

これらの語りの中で、とりわけ注目すべきは、「時機にかなった」「時宜を
得た」という言葉である。それは、「デメテルの時宜の畑つ物」(392—393)、

「この時季は伐木が時宜にかなう仕事である」(422)、「時節の雨」(492)、
「季節の霜」(543)などに見られるように、幾度となく繰り返される。
かくして、「正しい」「手順のよい」農労働とは、自然の順当な移り行き、
自然の秩序にかなった「時宜を得た仕事」を意味している。人びとは、自然
のしるしや星辰や動物たちの動きによって注意を促され、時機にかなった耕
作播種、時宜を得た収穫の季を知るのである。

また、618行目以下では航海の仕方について、695行目以下では結婚その他
の社会生活のあり方について述べられるが、そこでも同様の言葉が、より明
確に繰り返されるのである。すなわち、「そしておまえ自身は、時宜の航海
を、それが到来するまで、待つのだ」(630)、「時機にかなう仕事万端を。わ
けても航海については。」(642)、「時宜の航海〔航海の季節〕が訪れる」
(665)、「ものの限度に心を配れ、だが時機こそ万事につけ最高である。」
(694)、「時期になったら 妻をわが家に迎えるがよい、……これがおまえ
にとって時機にかなった結婚である。」(695—697)などである。

要するに、ヘシオドスは、人間生活あるいはその中心的要素としての「労
働」を、いかに「適正に」行うべきかについて、この「時機にかなった」や
り方で行くべきことを、きわめて具体的に語ったのである。人びとは、そこ
に述べられるような具体的な形で、宇宙自然の神的秩序を正しくとらえ、こ
れに従い同化することによって、人間生活を秩序正しいものにすることがで
きる。そして、「不死の神々にも疚しからず仕事に励む者」(827)こそ、「幸
福で栄えある者」(826)でありうるのである。このようにして、ヘシオドス
は、人間の労働に積極的な意味づけを行ない、正しい、あるべき労働の姿を
浮き彫りにしたのである。

結 び

ヘシオドスにおいて、神々の誕生やゼウスの世界は、宇宙自然の神的秩序
を表していたのであり、それはまさに「天工開物」の物語であった。そして、
その宇宙秩序の中に人間世界が位置づけられるのであるが、人間たちは、本

来、神の秩序から離れ得ざるべきものであるにもかかわらず、自らの分別と傲慢によって、知らず知らずのうちに神の秩序から道を踏み外していくのである。ここに、人間にとって「労働」の必然性が生じるのである。つまり、人間は、額に汗して働くことによって、宇宙自然のリズムを正しくとらえ、その秩序を人間世界の中で実現していかなければならない。人間の「労働」は、まさに「神意同化」の営みなのである。

このような考え方は、ヘシオドスが、彼の生きた「現代」を憂い、新たな未来の開拓を希望して歌ったものである。しかし、その考え方は、それから2500年以上も経過した人類の歴史の縮図とも言うべきである。近代社会が発見し、人間中心の考え方をつきつめていった結果、われわれの現代社会は、危機に直面することになった。現代は、まさに「鉄の時代」であり、今一度、宇宙自然の神的秩序に同化すべく反省を加える時なのである。

あらゆる文明は、人間の思索と労働の所産である。したがって、その労働観をそれぞれの古典にさかのぼって調べることは、文明を成り立たせている根元を明らかにすることになる。ゆえに、古典にみられる労働観を探究することは、危機にある現代社会におけるわれわれの行くべき道を考えるのに大いに役立つであろう。ギリシア・ローマ思想、キリスト教、仏教、儒教など、古典思想における労働観の探求と比較という課題は、まさしく現代的意味をもつのである。ここに見てきた「ヘシオドスの労働観」は、このような比較文明的研究への序章として位置づけられるのである。

〈注〉

- (1) 廣川洋一『ヘシオドス研究序説』未来社、1975年、pp.7—42
- (2) 同上書、pp.22—23
- (3) 同上書、p.23
- (4) 同上書、p.26
- (5) 『神統記』887行目から904行目。以下、()内の数字は、断りのない限り、『仕事と日』の行数を示す。なお、訳は、廣川洋一、前掲書の巻末付録『神統記』『仕事と日』の全訳を利用した。引用文中の[]内のものは、廣川の補いである。

また、訳に関しては、次の文献における英語訳 'HESIOD'S WORKS AND DAYS' H. G. Evelyn-White, "HESIOD The Homeric Hymns and Homeric", 1977, London も参考にした。

- (6) 廣川洋一、前掲書、pp.24—26
- (7) プロメテウスのこと。
- (8) 廣川洋一、前掲書、p.207
- (9) J.-P. ヴェルナン「ヘシオドスのプロメテウス神話」、J.-P. ヴェルナン、吉田敦彦『プロメテウスとオイディプス』みすず書房、1978年、p.48
- (10) 吉田敦彦「アイスキュロスとヘシオドスのプロメテウス神話」、J.-P. ヴェルナン、吉田敦彦、前掲書、pp.32—33。なお、アイスキュロスとヘシオドスにおいては、かなりプロメテウス観が異なることを心に留めておく必要がある。
- (11) J.-P. ヴェルナン、前掲書、p.59
- (12) 吉田敦彦、前掲書、pp.29—30
- (13) 清水正徳『働くことの意味』岩波書店、1982年、p.25
- (14) 廣川洋一、前掲書、p.212。ヘシオドスが労働というとき、多くは農労働に関わるものと解されるが、この青銅族の場合は少し異なるようである。ここでは、この点に関しては、さまざまな解釈がなされていることを注記するだけにとどめておく。
- (15) この「英雄たち」の世代の場合には、労働に関する語りは直接現れていない。けれども、青銅族の時代と英雄たちの時代において、戦乱がくり広げられることは、彼らがともに、暴力による「奪取」という形で生計の道を立てていかなければならない運命にあったとみることができるであろう。
- (16) 廣川洋一、前掲書、pp.58—69
- (17) 同上書、pp.184—185
- (18) 同上書、pp.234—236
- (19) H.G. Evelyn-White, op. cit., p.25
- (20) 383行目以下、約400行にもわたる後半部分が、農事を中心とするきわめて具体的な語りであることから、『仕事と日』をヘシオドスの「農事暦」とみなすこともできる。例えば、久保正彰『ギリシア思想の素地』岩波書店、1973年、pp.2—40など。

②) 廣川洋一、前掲書、p.150

②) 同上書、pp.28—30。また、このような考え方は、旧約聖書の「^{あめ}天が^{した}下のすべての事には季節^{きせつ}があり、すべてのわざには時^{とき}がある。……」(伝道の書3、1—13)を想起させる。

Hesiod's View of Work in *Works and Days*

Chiaki Nakano

Since the beginning of the history of humankind, God has often been considered to be at the center of the universe. When modern society arrived (post-Reformation), human knowledge came to be dominated by the thought that human beings were at the center of the cosmos. This thought reflected the manifestation of freedom of the human spirit, and it also allowed human beings to pursue their desires freely and without constraint. As a result, an affluent society was realized on the one hand, but on the other hand, various problems such as alienation, class antagonism, destruction of the natural environment and so on were brought about. The present period should be recognized as a critical time for us urgently to reflect once again on our view of human nature.

Up to the present time, work has been defined economically, socially, and in terms of self-actualization. Now we have to ask again the meaning of human work in relation to the larger aspect—the laws of nature, or the Will of God. In such a context, the ancient's view of work, from which the origin of human society is considered to be derived, will give us many meaningful and helpful ideas.

Hesiod, a Greek epicist, lived in 700 B.C. His *Theogony* is an epic poem, the story of the birth of the gods, and also the birth of the universe. And in *Works and Days*, he located the human world within the larger order of the universe. In these works we find the view that human beings originally were not outside the order of nature, or the will of God. But they unconsciously strayed away because of their prideful intelligence and haughtiness. This is the reason it became necessary for human beings to work in the first place, and we now need to consider

once again the deeper purpose of work. Through hard work—with sweat on our foreheads—human beings can once again move beyond the merely economic, social and personal reasons for working, can rediscover the rhythm of the universe through work, and the order to be found in the human world. Thereby can we come to understand that human work is none other than the effort of assimilating oneself into the will of God.